

書名：影法師

著者：百田尚樹

出版社：講談社

出版年月：2010年5月

総ページ数：330ページ

ISBN：9784062162241



推薦者

紙谷洋丞

鳴門教育大学事務職員

読書はしたいけれど何を読もうか迷うという方にお勧めしたい本は色々ありますが、今回は私が最近読んだ本の中から『影法師』という小説をご紹介しますと思います。

この本の著者は百田尚樹という方です。映画化もされて話題になった『永遠の0』や、本屋大賞に選ばれた『海賊とよばれた男』などで有名な作家さんなので、ご存じの方も多いのではないでしょうか。ご紹介する『影法師』は百田尚樹さんには珍しい時代小説です。

この本は、江戸時代、とある架空の藩で生きた「勘一」と「彦四郎」という二人の武士の友情を描いたお話です。身分の低い武士の子として生まれ、幼いころに父を亡くした主人公、勘一と、学問や剣術に優れ、将来を囑望されるものの、自らはいまひとつ将来への野望を持たない若者、彦四郎。二人は性格も身分も違いますが、不思議と馬が合い、刎頸（ふんけい）の契りを交わします。物語の冒頭で、その後の勘一が藩内で異例の出世を遂げ、彦四郎は不遇の一生を終えたことが明らかになるのですが、その経緯が勘一の回想とともに語られていきます。

さて、この本に登場する彦四郎という人物は、才能豊かでありながら驕るところのない、魅力にあふれた若者なのですが、彼自身は自分のそうした才能をもとに出世したいという意欲があまりありません。また、友である勘一の持つ志に深く共感するのですが、自らがその主役となって活躍することも望みません。結果的にそのことが他人から見た彼の一生を不遇のものにしてしまうのですが、彼の生涯は本当に恵まれないものだったのか、ぜひ、読んで確かめてほしいと思います。

本書からは、たとえ自分自身に大きなことを成し遂げられなかったとしても、他人にそれをできる可能性を与え、人知れず支えることで自分の生きて証を残した男の、尊さと悲しさが伝わってきます。そんな生き方は、教職を目指す方にも通じるところがあるのではないのでしょうか。そして何より、人生における友との出会いの素晴らしさ、ありがたさを改めて感じさせてくれます。

本書のタイトルである「影法師」の意味するところは最後の数ページで氷解していくのですが、その意味を知ったとき、きっと泣いていただけたと思います。そこには、単なる友情という言葉だけでは片付けられない、人生を懸けた友との絆があります。

登場人物もそれほど多くないので、普段時代小説を読まない方にもお勧めの一冊です。

